

ももさと 通信

2022年
8月1日
第5号

〈発行〉社会福祉法人桃郷 〒649-6112 和歌山県紀の川市桃山町調月58番地3 TEL 0736-66-8851 FAX 0736-67-8851



すべての子どもに豊かな育ちを

URL <https://www.momosato.com>
E-mail momosato@galaxy.ocn.ne.jp



笑顔あふれる家族登園日!

一方で、3・4歳児さんは、体育館でリトミックやゲームで大いに盛り上りました。ヨーヨーでパパ・ママを応援したり、親子でのふれあいリズム、パパチーム、ママチーム対抗のゲームでは大人もついつい本気(笑)。特に、ラーメン体操は大盛況!心地よい汗を流しながら身体をたくさん動かしました。

帰りのお集まりでは全員が合流。まずは5歳児による“かかしパレード”でみんなにご挨拶。あまりの素敵さに会場から一気に歓声が上がっていました。お話は「三匹のコブタ」。狼役を5名のお父さんに演じて頂きました。急なお願いにも快くお受けいただき、みなさん狼になり切ってくださいました。役作りに奮闘してくださいましたお父さん方に子ども達も大喜び。とても楽しいひとときでした。

ご家族同士が交流できる良い機会となり、横のつながりの大切さを改めて感じさせて頂きました。また、子ども達の成長をこれからも一緒に確認させて頂き、共に喜び合える園でありたいと思いました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

6月11日土曜日、今年度初めての大きな行事である家族登園日を開催しました。コロナ感染防止に配慮しつつではありますが、多くのご家族の参加があり、あちらこちらで笑顔がたくさん見られる時間となりました。

5歳児は園舎での“かかし作り”に挑戦!のこ切りを使つて土台の竹を切つたり、子ども達を中心にご家族で相談し合いながら、体・お顔そして服や手・髪の毛など細部まであらゆるイメージを膨らませながら個性豊かな8体のかかしが完成!5歳児畠には完成したかかし達が並んでいます。これから、大切な野菜を守つてくれるこ

とでしよう♥

みんなで過ごした大切な時間
～安心できるご家族とともに～

つぼみ園園長 沖殿 佳子

法人設立30周年を迎えるにあたり

～無認可施設「ひまわり園」創設前後～

来年度（2023年度）は社会福祉法人桃郷が設立し30周年が経ちます。

また、法人設立以前に、現在の「ひまわり園」の前身である無認可施設「ひまわり園」が岩出町（現岩出市）東坂本の地でスタートしたのが、1988年（昭和63年）です。「温故知新」、過去は未来へつながります。今回は、無認可施設「ひまわり園」誕生前後について、関係者の方々にお話をいたしました。社会福祉法人桃郷が次のステージに向かう道筋を皆様方と一緒に考えたいと思います。

出席者 尾坂 康子さん（元無認可ひまわり園保育士）広島県在住のため200mでの参加

小西 優子さん（無認可ひまわり園第1期生保護者）

松下 喜美代さん（無認可ひまわり園第1期生保護者）

田中 秀樹さん（元盲学校教員、理事）

福田 文子さん（元保健師）

船木 栄子（元保健師、常務理事）

司会 舟木 敏本 弘子（統括部長）

司会：おはようございます。来年度、桃郷が設立されて30周年になります。現在、職員が130名程いますが、ひまわり園の立ち上げのことを知らない職員が多く、もう一度、今までの歩みをこの一年をかけてふり返ろうということで、この企画となりました。よろしくお願いします。私は元橋本市の保健師で退職後桃郷に就職し7年目になります。

福田：元岩出市保健師です。退職後、農業をしています。船木さんには保健

事長、また、かつらぎ町を中心に、ひまわり園を支援するNPO法人「よりきこもり」を支援するNPO法人「より

みち」の理事長として、粉河で町づくりが人を支えるという思いで日々活動しています。

尾坂：現在は、広島県福山市にある児童発達支援センター「ひかり園」園長をしています。30周年という歴史を感じています。皆様と話せる期待しています。

小西：尾坂先生との出会いが原点です。和歌山市東部地区に住んでいますが、当時、尾坂先生が「こじか園」からひまわり園に変わつて行くということでついて行きました。8年前に市内支援学校の介助員として、ひまわり園の卒園生との関わりもある仕事をしていました。退職後、現在は小学校不登校児の支援員をしています。

松下：紀の川市旧打田町に住んでいます。息子が昭和61年に生まれ、2歳の時に小西さんと出会い、打田から和歌山線に乗つて無認可の「こじか園」に通つていました。地元にひまわり園ができるということを知り入園しました。息子はもう36歳になりました。私は、英語塾をする傍ら、NPO法人「障害者の豊かな青年期を考える会」の代表者をしています。

司会：無認可ひまわり園ができるまでをお聞きします。発達がゆっくりな子どもたちを見て、保健師としてどう感じていましたか。

福田：就職したのが1981年（昭和56年）。保健師として子どもの発達

療育のことを知らなまま現場に出て、頼るのは船木さんら先輩保健師でした。当時、岩出町（現岩出市）では、早期発見・早期療育ということで乳幼児健診を行つていましたが、発達のことを具体的に知る機会がなく、健診をするものの発達についてよく分からなく、船木さんを中心に町の保健師や関係者で1986年（昭和61年）に「那賀郡豊かな子どもたちの発達を支える会」を作り、子どもの発達を学ぼうと勉強会を行いました。その当時大津方式という取り組みを知り、どこからか、実際に赤ちゃんを連れてきて勉強会をしました。勉強する中で、

子どもの見方、発達の押さえ方もわかつてきて、お母さん方に少し遅れがあると言うものの、「じゃ、どうしたらいい」「どこに行けばいい」と保健師として、もやもやした気持ちがずっとありました。児童相談所に行き発達検査をしても、いまいちピンときません

でした。1987年（昭和62年）、岩出市で発達検査を中心とした発達相談事業を始めましたが、検査を受けてもフオローする場がない中で、発達検査を受けてもらつて、発達はこうですよ」というしかない環境が心苦しく、ただレッテルはりだけの健診をしているのではないかと悶々とし、健診を受けるお母さん方の気持ちを思うと「本当にこれでいいのか」と夜も眠れない保健

師としての悩みがありました。

船木：福田さんが言われるよう健診をしても虚しさだけが残り、「なんで

健診する?」と「言う気持ちになりました。早期に発達の遅れが分かつても、受け皿がなく、お母さんも悩ませることとなりますので、皆で子どものことを一緒に考えようということで、那賀郡の保健師が集まり発達について勉強会をしました。また、和歌山市に「こじか園」ができたのも刺激になりました。発達を支えなければいけないとい



座談会の様子

う機運ができ、全障研の会員や生活協同組合などの団体に支えていただきました。勉強会をすると、発達のことが分かつていて意欲が出てきて、今から考えればよく頑張ったと思うことが一杯あります。ふり返ると、尾坂さんの確かな保育目標があったから、私たちもついていけたと思います。

田中：無認可ひまわり園が開園するま

でに、岩出地区公民館で遊びの教室や土曜保育がありました。無認可施設を立ち上げるというのは困難なことが多くありました。那賀地域に困っている子どもが一人でもあれば、始めようかということで、プレハブを建てての活動が始まりました。その当時、那賀郡（岩出市、紀の川市）の保健師は力強い活動をしていた印象があります。

私は盲学校に勤めていて、小さい子どもに対応する中で、乳幼児健診の遅れを感じていました。また、「子どもの発達を支える会」での月1回の活動で、子どもたちは変わってきたことが確信につながり、毎日活動すればだけ変わることの思いから、活動を進めてきました。ふり返れば、単独でできたのではなく、保健師、教員、作業所職員、何よりも当事者である保護者と力を合わせ、また思いを寄せた運動のなかで作られてきたものだと思います。

司会：当時、資源や環境が整わない中、実際、子どもを育てられていてどういふ悩みがありましたか。

小西：当時、現在社会福祉法人一麦会理事長の山本耕平先生が発達相談員で、息子は多動で攻撃性が強く、それを先生が的確に判断して下さり、自分としては納得してほつとしたこともあります。分からぬよりも分かつたほうが進みやすいかなと思い、「違う違う」じゃなく、「そうなんや」「じゃどうしよう」という気持ちになりました。親が発達の遅れを早く受け止めるのも、早期発見・早期療育という点では分岐点だと思います。保健師さんや周囲の方々の何とかしようというエネルギーを受け止める私たちも大きなエネルギーが必要でしたが、船木さんをはじめ、当時の周りの大人が情熱をもつて無心にやつてくれることで、親として私たちもついていこうと思えたし、救いを求めていた自分が、障がいという枠を超えて精神的に支えられ、親としてそこにかけるしかないという思いになりました。時には、発達相談員の方から断定的に言われ、親は真っ暗な気持ちになりますが、そこをフオローし寄り添つてくださる保健師さんがいたことで親は支えられました。

松下：私は障害児施設に通所することに否定的なことを言われる環境ではなかつたので、私はそれは良かつたです。発達相談を受け、障がいがあることが分かり、かえつてほつとしました。初めての子どもで、「何でやる。何でやろ」と思っていたことが、「ああそ

うか、障がいがあるからこれができないかつたんや」ということが見えてきて

いました。あの頃は、気持ちがつながり、何もなければいけないと次につなげることができました。保健師さんが勉強し始めたところもありますが、そこをフオローして聞くことができ、親として救われる



無認可時のひまわり園園舎（プレハブ）

司会：船木さんが、無認可ひまわり園を立ち上げようとした決断のきっかけは何だったんですか。

船木：保育は尾坂さんに支えられ、決断は田中さんに背中を押されました。田中さんの「あとあとどの給料などのお金の計算をしなくていい。給料の計算をしたらできない」という、その強烈さが大きな方向性だったと思います。廃品回収もしなければいけないし、家も大変なことになるし、窮地に追いやられ、福田さんと「こんなしんどいこと、もうやめとけへんか」と話をしたら、田中さんから「そんなこと考えてないでやろうよ」と言われましたが、ふり返ると、支え合うものと一緒に人生を楽しみたいという思いでした。無認可ひまわり園が始まり、運営会議を私の家でしたときは、夫（現理事長）にも子守をしてもらつたこともあります。保護者の方も支えられたかもしませんが、私たちも、小西さん、松下さんら保護者の皆さんや尾坂さん、田中さんに支えられたと思います。

田中：和歌山は就学前の教育が遅れていたこともあり、和歌山に支えるところを作らなければいけないと思っていました。教職員組合も、発達相談員の両角正子先生から、子どもたちを支えることができるよう発達について研修をしました。また、山本耕平先生から「発達診断をしていたら下痢をする」と言つばかりで、後の手立てがない。苦

しいから何とかしてくれ」と言われ、それが土曜保育につながり、「こじか園」につながつたんです。しかし、那賀地方には受け皿の施設がなかつたので、那賀郡内で保健師活動に活躍していた船木さんらに思いを相談し、そして、尾坂先生がひまわり園に行きますということで、無認可施設ひまわり園が立ち上りました。当時、大変失礼なことを言いましたが、その時は何とかしたいという思いで必死でした。

司会：尾坂さんが、無認可ひまわり園に関わるきっかけは何だったんでしょうか。また、当時の保育の様子はどのようなものでしたか。

尾坂：無認可ひまわり園で働かせていたとききっかけは、全障研での出会いが大きかったと思います。和歌山市支部長の故上杉文代先生からは、「発達の道すじはみんな同じである」「発達には、たてとよこの発達がある」と発達の基本となる根っここの部分を教えていただきました。能力を伸ばすことだけでなく、その人らしい持ち味や人間味、内面の拡がりがよこの発達でした。プレハブはワンルーム、公園もないという「ないないづくり」でしたので、希望を二つ言わせていただきました。一つは床材をヒノキにすること、ヒノキだつたら子どもたちが走り回つてころんでも柔らかい素材です。二つは、園庭に芝生を植えてほしいということでした。この二つお願いしたところ、多くの方の協力があつて叶えていました。1日の保育の始まりは、古いリヤカーで、道路を挟んだガソリ



(右) 福田さん (中) 船木常務 (左) 田中理事

ンスタンドへ行つて水をもらうことでした。水を確保してからお迎えに行きました。そして、パワフルな子どもたちが多かつたので、子どもたちのパワフルをプラスに変えたかつたので、お散歩を保育のメインにすることにしました。何もない所だったので、リヤカーに子どもを乗せ、私が引つ張りパートの先生が押してくださいり、田んぼのあぜ道をとにかく皆で走りました。それが保育と云つていいかどうかわかりませんが、そういうことを毎日毎日重ね、半年たつた頃、水道も電気もつき、そこから保育が広がりました。毎日、水遊びをたっぷりし、真っ裸で泥んこ遊びをしました。何もないで、ゆつくりとたっぷりとゆつたりとやつていこうと、保育士みんなが集まつて相談すること、子どもたちが発達する力になつていたと思います。子どもたちもお友だちを意識したりする中で、少しずつ育つていると実感できたので励みになりました。田中さんから「保育は保育だけど、給料は自分で稼げ」、「給料はもらえないんですけど」（尾坂）「そうや、無認可は厳しいから」と言われました。廃品回収をしたり、夏祭りのバザーをしたりと自分の給料を少し稼いきました。「水も何もないところでできない」という気持ちにならなかつたのは、草の根運動を実践していいた職員や関係者の方々の姿があつたことと、「保育の部分を担うチームの一員」であるという共同体で取り組んでいるという安心感があつたからでした。



(右) 小西さん (左) 松下さん

そして、保育所や学校ではできなかつた子ども一人ひとりに寄り添つた実践ができるというワクワク感はとても大きかったです。「発達の道すじはみんな同じである」、一人ひとりの子どもたちは、今どのあたりの道すじを歩んでいるのか、子どもの姿からひも解いていく過程はとても楽しいものであり、子どもの気持ちを理解できた時の愛おしさはかけがえのないものでした。

司会：尾坂さんのお話を聞くと、今のひまわり園の保育の原点ですね。原点を作つてくださつたということがよく分かりました。

船木・尾坂さんのプログラムは、私は保育の七不思議でした。一般的の保育所が敬遠しがちな、水遊び、泥遊び、お散歩を軸にし、それが一日の保育の位置づけにありました。そして、ピアノなどの生演奏、一般的の園ではテープで流すところを、本物のピアノの音がすると子どもが寄つてきます。本物に触れないとだめということを教えて頂きました。尾坂さんのプログラムは、そういうデイリーでした。子どもの成長には欠かせない「遊び」という保育の基礎を考えていただきました。

司会：保護者の方は、無認可でお金がない時代だったので、保護者活動で色々なことをしなければいけなかつたと思いますが、どのような苦労をされましたか。

小西：巾着を作つたりバザーをしたり、給食当番もありました。当時は、先生が一生懸命されてるので、保護者もできる限り先生を支えようという気持ちでした。うら若きお母さん方が廃品回収をして、業者に量り売りをする段取りもしました。子どもたちが先生方に支えられているから、せめて、自分たちもやれることはやろうというプラスのエネルギーに変わりました。家で悶々としているよりも、給食当番をしながら、子どもたちが楽しんでいる姿を見ることで、親も頑張れます。保育の原点という点で、尾坂先生を見ていつも感じることは、いつも変わらない。

小西：巾着を作つたりバザーをしたり、給食当番もありました。当時は、先生が一生懸命されてるので、保護者もできる限り先生を支えようという気持ちでした。うら若きお母さん方が廃品回収をして、業者に量り売りをする段取りもしました。子どもたちが先生方に支えられているから、せめて、自分たちもやれることはやろうというプラスのエネルギーに変わりました。家で悶々としているよりも、給食当番をしながら、子どもたちが楽しんでいる姿を見ることで、親も頑張れます。保育の原点という点で、尾坂先生を見ていつも感じることは、いつも変わらない。

いつも安定されていて、保育にかける情熱や信念を表に出すのではなく、火が消えないような情熱をお持ちで、若い先生なのにリヤカーを引く、それは、誰にでもできることではなく、散歩することの大切さを実践してくださいました。あぜ道をリヤカーで引くひたむきな姿、おしとやかな先生なのに、どこにそんなエネルギーがあるのか、そこに尾坂先生の信念が垣間見え、その後に保健師さんやいろんな人が関わつてくれて、それぞれの力の結集が大きなエネルギーになり、結果的に子ども達は支えられました。息子も結婚して1歳半になる子どもがいますが、孫が、水を触り、土を触り、石を投げているのをじつと見守つているところは、ひまわり園の大事なところを受け継いでいるんだなと感じています。遊ぶのではなく、「遊びきる」という力を引き継いでいます。孫の姿を見て、息子も成長しているなあと思います。

松下：今になつたら、全部いい思い出ですが、「先生が子どもの療育に専念できるように、私ら親で少しでも運営資金を稼がなよう」というのが、小西さんをはじめ、親の思いでした。皆さんをはじめ、親の思いでした。皆さんは関わり方を見ていると、支援学校の先生、保健師など職業を持ちながら、ひまわり園を運営されている気持ちがすごく伝わり、私たちもできることはやつていこうと思つてきました。保育は月曜日から金曜日で、土曜日に廃品回収があり、アルミ缶とスチール缶をゴミ袋に入れ、「アルミ缶とスチール

缶の分別が発達障害とどう関係があるのかな」と思つたこともあります。廃品回収業者で車のバックも覚えました。当時は、しんどかつたけれども、なり、そのあと話し合いができるのがすごく大きかったです。親同士が繋がつて一緒に話をするから子どもたちが見えてくる、廃品回収の作業も親との交流ができ、「実はね」「そんなんあつたん」「みんな苦労してるんやな」と親同士のことをお互い知れたことが大変良かつたです。みんなが同じ方向を向いて廃品回収などをしながら、それぞの家が色々な問題を抱えていること、また悩んでいることを話し合うことで、作業はしんどかつたですが、何か楽しみがありました。自分とひまわり園という1対1の関係ではなく、親みんなの塊りがひまわり園で子どもを育てるという関係、親も含めて全員頑張つていかないといけない、苦しみ以上にそれ以上のものがあつたからできたと思います。給食当番の時も、「こんなにして保育しててるんやな」と見ることができるし、風に乗つて子どもたちの声が聞こえると、「帰ってきたんやな」と思ふし、しんどいけど、いつもは見えない子どもの姿が見えるといふことではおもしろかつたです。いろんなことで運営が成り立ち、頭で発達を理解するのではなく、生身の子どもたちの姿を見えたことは良かったです。そういう意味で、スクールバスの送迎は、親が見るのはその場面だけというこ



尾坂さん

ろで、すごい大事なことを見落としているのではと思います。迎えの時に先生とのちょっとした会話がなくなることは、便利さの陰で失くしているものが多いのではないかと・・・。今だから言えるのかもしれません、経験してきた私にとっては、親同士の話、出会いや思いを深める時間が削られています。ひまわり園が、岩出市東坂本の前の道を通ると、今でもキュンとして、当時は文句ばかり言つてたかもしれません、貴重な体験をさせてもらつたんだなと思います。

司会：いい話を聞かせていただきまし

小西：スクールバスで補足させていただきますが、私は支援学校のスクールバス介助員を4年間経験しましたが、お迎えの時に、新1年生の保護者の方

が帰らず、子どもを送つていくバスが出ても、ずっと話しているのは、ひまわり園の卒園生の保護者ばかりでした。そこで、同年齢や異年齢の親同士のつながりができます。スクールバスという利便性のなかでも、熱心、一生懸命というひまわり園が大事にしていることは引き継がれているように思いました。力のあるお母さんがいるなど感じました。

司会：無認可施設ひまわり園への行政の支援はどうでしたか。

福田：私は行政の保健師でしたが、発達相談を始める時もなかなか理解してもらえませんでした。行政に乗せていくにはなかなか苦労が多かったです。旧桃山町は船木さんの働きかけもあり、理解があつたので羨ましくもあり、行政で働く保健師として歯がゆかったです。

船木：忘れられない言葉があります。認可施設がほしいと県に働きかけたとき、当時の課長さんに「認可施設になつてからが県の仕事で、無認可施設は無認可なので自分でするように」と言わされました。「拾い上げていくのが行政の仕事ではないか」と悲しくなつたことがあります。でも、シンボジウム等をすれば協力的に支えてくださつた部分もありました。現在のひまわり園を建設する際、国・県補助金のほか、建設費用の一部として旧桃山町から1,000万円の補助金があり、老

人クラブなどの他団体が一緒になつて協力していただきました。バザーも送迎のことも小西さんや松下さんがおつしやるよう、無認可での運営は、強いつながりになりました。当時、プレハブの床がヒノキ材に代わったのは榎本林業さんに無料で間伐材をいただいたものです。

田中：行政には請願書や陳情書を提出して訴えてきたこともあります。その中の怒りがエネルギーになりました。無認可施設がどういう役割をしたか、お

母さん同士が信頼し、自分の子どもだけでなく他の子どもも見て一緒に考える、廃品回収もしんどいが、一緒にやつて心が通じるということは大事なことで、いつ会つてもその当時に戻り話ができます。無認可といつても事業であります。無認可といつても事業であります。時代は変わつても生まれて、いつ生まれても安心して子育てができる社会になりますよう、そして

子どもたちの健やかな育ちを願う親の気持ちは変わりません。どこに生まれても、いつ生まれても安心して子育て

ができる社会になりますよう、そして「和歌山で生まれてよかつた」「○○で生まれてよかつた」とお母さん方が思える地域格差のない療育支援体制が充実していきますよう、今後ますますのひまわり園のご活躍、発展を願つています。

司会：無認可を経験した職員や保護者の方と、今の職員と保護者の方とは当然感覚も違いますが、法人設立30周年以降もずっと事業を続けていくために職員の力量が問われるわけで、結局、職員は4,5千万円を集めてきました。今の時代、銀行は容易にお金を貸してくれますが、それに頼れば、何のために誰のために、どうすればいいのかがぼやけてしまい、目の前のことしか考えないようになってしまいます。既

に出来上がつてある施設に就職した職員は、はじめて一生懸命ですが、そういう面で弱さがあります。どういう問題があつてどんな運動ができるか考えている職員は子どもと一緒に歩んでいくという覚悟があります。桃郷でも、お金（予算）を用意して使いなさいでなく、事業をするときは、たとえ千円でも事業の説明をして職員が自ら集めてくるようになることが大事なことだと思います。

尾坂：制度が目まぐるしく変わつています。時代は変わつても生まれて、いつ生まれても安心して子育て

ができる社会になりますよう、そして子どもたちの健やかな育ちを願う親の気持ちは変わりません。どこに生まれても、いつ生まれても安心して子育てができる社会になりますよう、そして「和歌山で生まれてよかつた」「○○で生まれてよかつた」とお母さん方が思える地域格差のない療育支援体制が充実していきますよう、今後ますますのひまわり園のご活躍、発展を願つています。

司会：無認可を経験した職員や保護者の方と、今の職員と保護者の方とは当然感覚も違いますが、法人設立30周年以降もずっと事業を続けていくために職員の力量が問われるわけで、結局、職員は4,5千万円を集めてきました。今の時代、銀行は容易にお金を貸してくれますが、それに頼れば、何のために誰のために、どうすればいいのかがぼやけてしまい、目の前のことしか考えないようになってしまいます。既

ごあいさつ

2022年度も早や四半期が過ぎました。昨年度は、猛威を振るう新型コロナウイルス感染症により、いくつかの事業所で休園や事業の縮小等を余儀なくされ、子どもたちや保護者の方々にご迷惑をおかけすることになりましたが、皆様方のご理解とご協力により2021年度を無事終えることができましたこと、心から感謝とお礼を申し上げます。コロナ禍の中、子どもたちにとって、何が最善かを問い合わせ最善の判断をしたつもりでしたが、次々と新たな課題が生まれ、工夫や知恵を出しながら取組んできた一年だったと思います。



さて、昨年度は懸案であった法人の第一期中期計画（2022～2026）、「桃郷プラン」を策定いたしました。策定にあたったのは、各事業所から選出された12名の保育士・児童指導員からなる、「桃郷プラン委員会」で、職員自らの手作りによる計画です。委員会で議論を重ねる中で、まずは法人として、一つの指針となるような計画にしようということになり、職員の夢と希望が詰まったプランを策定することができました。今は、計画の立案・策定はコンサルタント会社に委託するのが主流ですが、職員が自らの将来を見据え、自ら考え熱意を持って策定に取り組んだことに大きな意義があると考えております。社会福祉事業は理念がなくてはできません。そして、その理念を実現するのは現場に携わる保育士や児童指導員たちです。「桃郷プラン」は、職員の夢、社会福祉法人桃郷の理念を叶えていく指針になるものと確信しています。

社会福祉法人桃郷は、法人設立が1993年6月、来年度はいよいよ法人設立30周年という節目の年を迎えます。障害者福祉制度は、措置制度から支援費制度、そして障害者自立支援法を経て障害者総合支援法に、また、乳幼児に関する施策は再び児童福祉法に位置付けられるなど大きく変遷してきていますが、社会福祉法人桃郷の理念は、変わることなく、子どもたちの豊かな育ちを支えています。

「すべての子どもたちに豊かな育ちを」のスローガンのもと五つの基本理念をもとに、今後も子どもたちと保護者の方々に寄り添った支援を行ってまいりますので、引き続き、皆様方のご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

社会福祉法人 桃郷
理事長 船木 孝明

◎監事 千田 弘 山名純一	◎理事 藤本綾子 弘子 山本翔太	◎評議員 船木孝明 岩原紀子 田中秀樹	◎評議員 峰田朋子 中村博行 中浦秀行 山名和章	◎評議員 藤範みつ 松山義弘 （法人事務局内） 66-8851
---------------------	---------------------------	------------------------------	--------------------------------------	---

法人役員（敬称略）

千田 弘
藤範みつ
松山義弘
（法人事務局内）
66-8851

第三者委員（敬称略）

大塚商会様
和遊協社会福祉事業協力会様
ひまわり園保護者会様
つくしんば園保護者会様
つばみ園保護者会様
株式会社築野食品様
カーブス様

皆様がたからのご寄付、ご寄
贈ありがとうございました。
(順不同)

ご寄付等お礼

桃郷の理念

- ① すべての子どもたちが平等な権利を享受し、地域社会に参加できることを目指します。
- ② 保護者、家族、地域と共に学びあい、共に育ちあうことを目指します。
- ③ ひとり一人の子どもの発達を理解し、生活を通して豊かな人生を歩む基礎づくりを目指します。
- ④ 地域福祉の担い手として、地域ニーズに応える取り組みを実践します。
- ⑤ 保健、福祉、医療、教育、地域の皆様と手を取り合い、子どもを支える地域づくりを目指します。

未来へ羽ばたく仲間のために ～思春期保健相談士を取得して～

私はこの3月に法人からの助成を受けて、「思春期保健相談士」という資格を取得しました。この資格を取得したいと思つたのは、支援を必要とする子ども達に対して、思春期教育があまりにも少なすぎると感じたからです。そしてこの思いに至つたのはある出来事からでした。放課後等デイサービス事業など、私の身の回りでは性に関する出来事が多発していました。その中で、これは本人だけの問題ではなく、適切な異性との接し方や性教育を伝えてこなかつた私たちにも非があるのではないか、予測できたのに見て見ぬふりしてきたのは周りの支援者ではないのかと強く感じていました。

しかし、何も知識が無い状態で伝えるにはあまりにも無謀だと感じ、思春期に関する本を読み、研修にも参加しました。ところが、自分で納得できるものが今一つ無く、またある講師先生に『強制不妊の方法』だつたときは、旧優生保護法が見直された現在でも、支援を必要とする方への性に関する支援や助言の方法があまりにも考えられていないことに愕然としました。そして、知識だけを習得するだけでなく、子ども達や周りの人々に伝えるには資格が必要だと思い、日本家族計画協会が主催する思春期保健相談士を取得する事を目指しました。本来ならば、養護教諭や助産師、保健師が取得する資格なので、医療的知識が無い私には研修内容はとてもハードルが

高く、全ての項目を取得するのに一年を要しました。

思春期保健といつても性教育だけではなく、性犯罪・性虐待・男女の体の生理に及ぼす影響・セクシヤリティ教育の国際基準・ネットでのトラブルなど、思春期を取り巻くあらゆる項目を各分野のプロフェッショナルから講義を受けました。まずは性教育を学習する前に、私達は1400兆分の1という奇跡的な確率でこの世の中に生まれた事や命の大切さを伝えていくことが大事だと教えて頂きました。

三回目の研修では、実際に思春期保健相談士として活躍されている方や各学校に思春期に関する講義を行っている方とグループ討論を何度も行いましたが、まだ支援を必要とする子ども達への性教育が広がっていない事を痛いほど感じました。『支援学校から依頼はあるが、どういう風に伝えればいいか、すごく悩む』とおっしゃっている方が本当に多かったです。

2023年度より文部科学省より生命(いのち)の安全教育が始まります。その中では、

- ・被害者にも加害者にもならない教育、わたしのからだはわたしのもの、誰がどこを触つていいのか自分が決めて良い
- ・ダメダメ教育ではなく、自分の体は自分で守る選択ができると主体的に伝えられるべき
- ・防犯教育にとどまらず、包括的性教育の中の一つとして、性の安全教育であるべき
- ・性教育は人権教育

性は受け身になる事が多い事から、思春期外来（ユースクリニック）というものがあり、女性のトラブルで悩んでいる思春期の子にはぜひ知つてもらいたいです。思春期専門のクリニックでは、不安や恐怖感がかなり軽減される上に、病気の早期発見や望まない妊娠の早期の相談が可能ではないかと思います。

今後は、微力ですが少しずつ周りの理解も含め、声を上げていきたいと思いまです。当初は研修を修了したら子ども達にやつと話ができると思っていましたが、研修を終えた今は「やつとスタートラインに立てた、これからもつと知識や方法を勉強しなければ」という心境です。まずは自分の周りにいる大人（保護者や職員）や子ども達に今回の研修で受けた事を伝えていければと思っています。

どうにかしたいという思いから早や四年。

「二度とこんな思いはしたくない、そして子ども達にもさせたくない」という強烈な気持ちが今日までの私を突き動かしてきましたんだと思います。

（放課後等デイサービス事業
青空つばさ管理者 高橋真伊）

（法人事務局長 竹中俊和）

災害福祉避難所に関する 協定を締結（かつらぎ町）

2月1日付で、かつらぎ町（中阪雅則町長）と社会福祉法人桃郷とで、災害時の福祉避難所の開設や運営に関する協定を締結しました。

この協定により、災害時、あすなろ教室やつくしんぼ園を福祉避難所として開設し運営することになりました。



管理職研修を実施 ～メンタルヘルス対策～

さる2月22日（火）、「職場におけるメンタルヘルス対策について」と題し、村上社会保険労務士事務所 村上寿味子氏をお招きして、管理職職員を対象に実施しました。

研修の目的は、管理職職員は、職場におけるストレス要因の改善を図る立場にあり、職場のメンタルヘルス対策ではとても重要な役割を担つているからです。職場の人間関係が良ければ、職場でのストレスは少なくなるそうです。管理職職員は、職場で一日気持ちよく過ごすために出勤したら、挨拶は自分から元気よくしてみませんか。

発達講座⑤

発達をみつめて

児童発達支援センターひまわり園

発達相談員 笠原 千愛

今年度の発達講座は、1年を通して乳幼児期全般の発達について書いていきたいと思います。1年の講座を読めば、乳幼児期全般の発達が大まかにわかる、そんな講座を目指し、桃郷発達相談員が順番につないでいきました。1年間よろしくお願ひします。

さて、第1回目は乳児期後半から1歳半ころの発達についてです。

乳児期後半は、健康的な生活を土台に生活リズムが整い、移動運動の発達にともない活動の範囲が広がっていく時期です。興味や関心に基づき自由に動ける身体となり、活動範囲が広がることで新たな物や人との出会いが可能になって、少しずつ乳児期から幼児期への移行の準備がはじまっています。中でも10ヶ月ころは、幼児期最大の発達の節目である1歳半ころの力を獲得するための発達の原動力が生まれる時期です。これまで親子の間でたっぷり愛着関係を育んできた子どもたち。その信頼関係を土台に自分と相手以外の第3者を共有することができはじめ、他者の行為を模倣したり、相手に物を手渡したり、相手の指さす対象を見たり、という共同注意の成立により、ことばの根っここの力である三項関係の力が獲得されます。同時にことばに関心をもつようになり、特定の音声が特定の意味をもつて自分の気持ちや事物、状況にむすびつきはじめます。また、共同注

意の成立は、子どもが他者を自分と同じように意図をもつ存在であると理解しはじめたこと、自分を他者のまなざしを通して理解したじめたことの証明であります。

1歳半を迎えるころ、子どもたちは自分の意図をもち、それを表現できるようになつてきます。二足の足でしっかりと身体を支え歩行できるようになり、自由になつた手で道具を操作し、身の回りのことへも意欲的に取り組む姿がみられるようになります。1歳になりたての頃は目的に直線的に向かい、ズボンの片側に両足を入れてしまつて“うまくいかない！”なんて怒っていた子どもたちも、1歳半を迎えるころになるともう1つ穴があることに気づき、「うデハナイ～ダ！」と方向転換ができるようになります。この「うデハナイ～ダ」に基づく思考や行動様式が獲得されることも1歳半ころの大きな特徴です。自分の力でできたことを親しい大人に認めてもらうことが何よりの自信となり、ますます“自分のことは自分でしたい！”と気持ちをふくらませ自我を誕生させていきます。また、ことばがコミュニケーションの手段となり意図を伝えられるようになるのもこのころです。ことばによって、誰が聞いてもわかる意思表示が可能になる中で、子どもたちは相手に受け止めてもらう事の喜びを重ねています。同時に思いを受け止めもらえない場面を経験することになります。はじめはなぜ受け止めてもらえないのかわからず、激しいだだこねとなります。しかし、そうした経験の中で、自分と相手は異なる意図もつ存在であることに気づき、少しずつ相手の意図と自分の意図を調整する力をつけていきます。相手を意識することは自分への理解を深めていくこととなり、ますます自我をたくさんしくしていくことにつながっています。

社会福祉法人 桃郷

■児童発達支援センター

ひまわり園	〒649-6112 和歌山県紀の川市桃山町調月58番地3	☎0736-66-0995	✉0736-66-1905
つくしんぼ園	〒649-7207 和歌山県橋本市高野口町大野74番地1	☎0736-42-0100	✉0736-43-0200
つぼみ園	〒649-6112 和歌山県紀の川市桃山町調月736番地1	☎0736-66-0013	✉0736-66-0023

■児童発達支援事業

木の実教室	〒649-6236 和歌山県岩出市曾屋370番地17	☎0736-62-0815	✉0736-62-0856
くるみ教室	〒649-6246 和歌山県岩出市吉田228番地1	☎0736-67-7788	✉0736-67-7799
くまの子教室	〒649-7113 和歌山県伊都郡かつらぎ町妙寺146番地2	☎090-3673-9958	

■多機能型事業所

あすなろつばさ	〒649-7112 和歌山県伊都郡かつらぎ町中飯降1062番地1	☎0736-23-2900	✉0736-23-2929
---------	----------------------------------	---------------	---------------

■放課後等デイサービス

青空	〒649-6427 和歌山県紀の川市西井阪224番地1	☎0736-77-0070	✉0736-77-0050
粉河青空	〒649-6531 和歌山県紀の川市粉河1535番地3	☎090-6969-4195	
青空つばさ	〒649-7113 和歌山県伊都郡かつらぎ町妙寺146番地1	☎0736-22-5551	✉0736-22-5561

■相談支援事業所

桃郷障害児者相談支援センター	〒649-6222 和歌山県岩出市岡田649番地2	☎0736-67-8891	✉0736-67-8892
つくしんぼ相談支援室（つくしんぼ園に併設）	〒649-7207 和歌山県橋本市高野口町大野74番地1	☎0736-42-0100	✉0736-43-0200

■法人本部

事務局	〒649-6112 和歌山県紀の川市桃山町調月58番地3	☎0736-66-8851	✉0736-67-8851
-----	------------------------------	---------------	---------------

